

# 未来のトキを表す「タラ」文の意味用法をめぐって\*

安善柱\*\*  
ahnsj@swu.ac.kr

## 〈目次〉

- |                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| 1. はじめに          | 3. 未来のトキを表す「タラ」文の意味用法 |
| 2. 研究の範囲及び、問題の在処 | 3.1 未来のトキの「タラ」文の特徴    |
| 2.1 研究の範囲        | 3.2 他の文法形式との違い        |
| 2.2 問題の在処        | 4. おわりに               |

主題語: 未来のトキ(future time)、タラ(TARA)、前提(precondition)、焦点(focus)、根底の文(based sentence)

## 1. はじめに

日本語では、前後件の因果関係とされる「条件」の形式が、時間関係の「トキ」の表現として用いられることがあり、次の(1)における、「when」と受け取られる場合の「タラ」や、(2)のb.の状況の「タラ」がそれである。

- (1) 今夜、主人が帰ってきたらたずねましょう。

If my husband comes home tonight, I'll ask ;

When my husband comes home tonight, I'll ask. (赤塚1998;8-9)

- (2) a.[大きい手術を前にして] 私が死んだら、火葬に付してくれ。

b.[不治の病にかかって] 私が死んだら、火葬に付してくれ。

上の(1)の「タラ」は、例えば主人が出張に出かけていつ帰ってくるか不確かな場合の「if」の状況と、いつも通りに今日も朝会社に行って夜帰ってくることになっているような「when」の状況との両方に用いられる。また、(2)の「タラ」も、a.では死ぬかどうか分からない場合

\* この論文は、2011年度のソウル女子大学の校内学術特別研究費の支援によって作成されたものである。

\*\* ソウル女子大学 日語日文学科 教授、日本語学

であるのに対し、b.では近いうちに死ぬようになっている場合に用いられ、それぞれ条件とトキとの表現になっている。

本研究では、条件の形を取っていないながらも、とりわけ「未来のトキ」を表している「タラ」文がどのような使用状況の下で使われ、文の中でどのような役割を果たしているのか、ということについて考察していきたい。

## 2. 研究の範囲及び、問題の在処

### 2.1 研究の範囲

以下、未来のトキの呼び方に関わる諸説をまとめることで、研究の範囲を示すことにする。冒頭の(1)において、「if」の「タラ」が仮定条件と広く呼ばれるのに対し、「when」の「タラ」は確定条件<sup>1)</sup>と呼ばれることが多く、庵(2000;224)によれば、仮定条件は前件が成立するかどうか分からない場合であるのに対して、確定条件は前件が成立することが分かっている場合のものである。

そして、豊田(1987;102,117)は、確定条件のことを「時間がたてば必ずそうなると決まっている未来のことを、条件の形で言うもの」としており、これをさらに特定と非特定とに分け、例えば「この電車は京都に着いたら、3分停車します。」を特定の確定条件とし、「12時になったら、太陽は真上に来ます。」を非特定の確定条件としている。

一方、小林(1996;11)のいう確定条件は、その定義がこれらとは異なっていて、「条件句が原因・理由を表し、条件句と帰結句とが必然的な因果関係で結びつくもの」である必然確定条件と、「条件句が帰結句の事態の成立する単なるきっかけであったり、帰結句の事態を認識する前提であったりするもの」を表す偶然確定条件とに分けられている。

ちなみに、豊田(1987)の特定の確定条件と非特定の確定条件はそれぞれ、小林(1996)における「未来時において動作・作用の完了した場合を仮定するもの」である完了性仮定条件と、「ある条件が成立する際にはいつでも以下の帰結句の事態が成立するという、恒常的・普遍的性格をもったものとして提示するもの」である恒常条件に当る。なお、「カラ」などが用いられる小林(1996)の必然確定条件と、「薬を飲んだら、熱が下がった。」のような小林

---

1) 赤塚(1998)では、このような確定条件を、確定未来条件と呼んでいる。

(1996)の偶然確定条件は、豊田(1987)ではそれぞれ、既定条件・現在と、既定条件・過去としている。

以上のように、従来の研究における、呼び方とその中味とはさまざまである。本研究では、豊田(1987)の特定の確定条件、赤塚(1998)の確定未来条件に当たる、未来のトキをその対象とすることにする。ところで、(1)からも窺えるように、英語の「if」に対応する、一般に仮定条件と呼ばれるものは日本語では「バ」「ト」「タラ」であり、これら条件形式間の使い分けがしばしば問題になっているが、豊田(1987)の特定の確定条件の類いは、英語では「when」や「after that」等のトキの表現として現れている一方で、日本語では仮定条件と同じ条件形式がそのまま使われていて、とりわけ日本語の場合、仮定・確定条件間の区別もまた求められている。但し、安(2008a)によると、未来のトキを表す条件形式には、「タラ」が多く使われ、「ト」はあまり馴染みがないため、本研究では、未来のトキを表す条件形式として、主に「タラ」を取り上げて考察することにする。

## 2.2 問題の在処

そもそも日本語では時間関係の表現に何故条件の形が使われるのか、またそこから何の効果が引き出せるのか疑問であるが、従来の研究で、こういった、いわゆる確定条件としてのトキの表現を主に取り扱っているのはあまり見当たらない。何しろ、その意味用法についても、ほとんどの研究で簡単な言及にとどまっていることが多く、例えば、横林・下村(1988;3)は「その時」または「その後で」という意味を表すとし、森田(1990;75)は「~タトキニ、~テカラ」と同じだとしている。ところで、このうちの、「~テカラ」と「その後で」はもっぱら時間の前後関係に焦点が置かれているのに対して、「その時」と「~タトキニ」は名詞修飾節の表現である。これらの二通りの時間関係の表現と未来のトキを表す「タラ」とが果たして同じだと言えるかどうかは明らかでない。

そこで、本研究では、未来のトキの「タラ」の意味役割を探るべく、まずその使用条件及び、意味用法等を調べた上で、従来の研究で取り上げてきた「~テカラ」「その後で」「その時」「~タトキニ」<sup>2)</sup>と未来のトキの「タラ」との違いを考察していくことにする。詰まるところは、トキを表すのに何故条件の「タラ」が用いられるのかに迫り、未来のトキの「タラ」の文中での役割が明らかになってくると思われる。

2) これらは、以下、「テカラ」「タアトデ」「トキ」「トキニ」で統一することにする。

### 3. 未来のトキを表す「タラ」文の意味用法

#### 3.1 未来のトキの「タラ」文の特徴

「タラ」文が未来のトキとして用いられるためには、まずその前件に関連して話し手と聞き手の間に共通の認識がなければならず、こうした暗黙のうちの前提こそ「タラ」文を未来のトキたるものとさせ、仮定条件の「タラ」文と区別付けている。また、未来のトキの「タラ」文は、前件が後件のどちらかに焦点が置かれるようになっており、さらに、そのどちらに焦点が当てられるかによって、「タラ」文の根底に隠されている文も二通りに分けられ、違いが出てくるのが分かる。

以下、未来のトキの「タラ」文と関わっている前提と焦点、根底の文、そして「タラ」文の意味役割についてもう少し詳しく見てみることにする。

##### 3.1.1 前提

次の例を見ると、トキを訪ねているAの質問に対して、Bは自然な流れの答えになっている反面、B'はどこか的外れであって不自然である。

(3) A：[金を貸せというBに] いつ返すの。

B：給料もらったら、返すよ。

B'：\*宝くじに当たたら、返すよ。

AとBのやり取りには、AとBの両方にBの主語たる動作主がサラリーマンであるといった前提があるのであって、時間さえ経てば自ずと前件「給料をもらう」が成立することになっている。この前提があるからこそBの「タラ」は未来のトキの表現になるわけである。ところで、もしBの主語が就活中の人間であれば、先のような前提は成立できず、AとB'のやり取りとさほど変わらなくなる。AとB'のやり取りが不自然になるのは、B'にはBにおける前提がないからである。B'の前件「宝くじに当たる」は成立するかどうか不確かなことであって、B'は仮定条件の表現にとどまっている。次の例も同じである。

(4) A：大学を卒業した後はどうするのですか。

B：大学を卒業したら、日本の会社に就職したいです。

上の(4)のやり取りが自然なのは、AとBの間に、「Bは大学の卒業を間近にしている。」といった前提があるからなのである。

このようなことは、冒頭の(1)の「when」の「タラ」文や、(2)b.の「タラ」文に関しても同じことが言える。(1)の「タラ」文の前件「今夜、主人が帰ってくる」が「when」と受け取られる場合は「if」の状況とは違って、「話し手の夫は(会社かただのお出掛けかで)今留守中で今夜の決まった時刻に帰ることになっている。」といった前提を話し手と聞き手が共有しているわけであり、(2)b.も括弧中の状況、つまり話し手が不治の病にかかっていることを話し手と聞き手が知っているという前提に基づいての発話なのである。

このように、未来のトキの「タラ」文が成立するためには、話し手と聞き手が、「タラ」文の前件の生起が確定した事実として認識される状況を共有している、ということが前提にならなければならない。

### 3.1.2 焦点

未来のトキの「タラ」文の前件は例えば「今夜、主人が帰ってくる」「私が死ぬ」「給料をもらう」「大学を卒業する」のようになっているけれども、実際この前件が表しているのは、動きや事態そのものではなく、そのような動きや事態が起こる時期である。つまり、未来のトキの「タラ」文は、「未来の(何かが起こる)時期に、何がどうなる[何をどうする](だろう/よ〜たい〜なさい)」<sup>3)</sup>を表しているものなのである。

特に、相手に何を主に伝えようとするかによって、「タラ」文の前件と後件のどちらか一方に焦点が置かれるようになる。つまり、前件のトキに焦点が当てられることもあれば、後件の動きや事態に焦点が置かれることもあり、焦点が前件に置かれるときは「[イツ]、何々する」の「イツ」を、後件にあるときは「未来のあるときには、[ナニをする]」の「ナニ」を、それぞれ目立たせているわけである。

まず、前件に焦点がある例としては、先の(1)と(3)が挙げられるであろう(便宜上、以下に再掲しておく)。この場合のそれぞれの後件「たずねる」「返す」は話し手と聞き手にとって既知の内容、つまり旧情報であり、聞き手が知りたがる、其れ故話し手が伝えようとすることは、まさしく前件「今夜、主人が帰ってくる」「給料をもらう」それぞれの時期なのである。

3) 未来のトキの「タラ」は、後件に意志や命令などのモダリティを伴うパターンが多くなっていることから、会話で主に現れるものだと言えそうである。

- (1) 今夜、主人が帰ってきたらたずねましょう。  
(3) A: [金を貸せというBに] いつ返すの。  
B: 給料もらったら、返すよ。

また、後件に焦点がある例としては、先の(2)b.と(4)が挙げられる(便宜上、以下に再掲しておく)。この場合のそれぞれの前件「私が死ぬ」「大学を卒業する」は、時間の経過とともに起こることになっている確定の事実として話し手と聞き手の両方に認識されている前提で、かつ旧情報であり、その時ナニをどうするかを言っている「火葬に付す」「日本の会社に就職する」といった後件こそが、話し手が聞き手に伝えたいメインのことなのである。

- (2)b.[不治の病にかかって] 私が死んだら、火葬に付してくれ。  
(4) A: 大学を卒業した後はどうするのですか。  
B: 大学を卒業したら、日本の会社に就職したいです。

但し、焦点というのは話し手がとりわけ強調したい部分であり、前件と後件のうちのどちらに焦点が置かれるかは前後文脈の流れの中で決まるようになる。

### 3.1.3 根底の文

未来のトキの「タラ」文がどのようにして作られるのかを考えるに当たって、その根底に潜まれている文を引き出す必要があるように思われる。但し、前件と後件のどちらに焦点が置かれているかによって、「タラ」文の根底にある文には違いが出てくる。まず、前件に焦点のある、(1)と(3)は、

- (1)' 今夜の7時ごろ、主人にたずねましょう。  
その時[⇒今夜の7時ごろ]に、主人が帰ってくるのですから。  
(3)' 月末に、返すよ。  
その時[⇒月末]に、給料をもらうのだから。

の(1)' と(3)' のそれぞれの二文を一文にまとめたものと見られる。但し、(1)' と(3)' の二番目の文は始めての文の状況説明のために付け加えられたものである。つまり、(1)と(3)の「タラ」文は、明確な時間や時期が特定できない、または何らかの理由で特定の時の表明

を避けるなどから、きっかりとした時の表現の代わりにやや漠然とした周辺状況が前件として居座ったパターンとなっているわけである。周辺状況としての動きや事態はまだ起こっていない事柄であるため、条件の形を取るしかないのであろう。

ところで、後件に焦点の置かれる(2)b.と(4)の根底の文は、(1)'と(3)'のようなパターンではうまく収まらない。というのは、次の

(2)b.' [不治の病にかかって] 6ヶ月後に、私を火葬に付してくれ。

その時⇒6ヶ月後]に、私は死ぬのだから。

(4)' 来年の4月に、日本の会社に就職したいです。

その時⇒来年の3月ごろ]に、大学を卒業するのですから。

からは、不自然ながらも強いて言えば、前件に焦点の置かれる(1)と(3)のような解釈が出てしまい、後件に焦点のある(2)b.と(4)のニュアンスは感じられないからである。

一般に、(2)b.と(4)の前件の「死ぬ」「卒業する」といった出来事が、話し手と聞き手を含め誰にとっても揺ぎのない既知の事実である場合、こういった前件に焦点が当てられることはまずなく、どちらかと言えばこの類いの前件は、既知の旧情報を示すとされる主題の「は」が付く環境になるのであろう。そこで、(2)b.と(4)の「タラ」文は、

(2)b." 私の死後には、私を火葬に付してくれ。

(4)" 卒業後には、日本の会社に就職したいです。

のような、時の語句を主題に持つ単文からできたものではないかと考えられる。但し、ここ「～後(に)は」の「～」部分は、(2)b.と(4)におけるそれぞれの前提、つまり「話し手は命ごくわずかである。」「話し手は卒業を間近にした学生である。」と関わりを持つ内容になるのであろう。(2)b."と(4)"における時の語句「死後」と「卒業後」が先のことであり、まだ起きていない事柄であるため、「(後で)～タラ」といった条件の形式が用いられるのである。(2)b.と(4)では、条件の形式を使うことによって、時を際立たせることなく話の出出しをやんわりと切り出し、後件の動きや事態に関心を移らせているのであろう。

### 3.1.4 直接的なトキ表現の「タラ」文

さて、未来のトキの「タラ」文には、次に見るように、トキそのものの表現が前件に来る

こともあり、

(5) A: [種を蒔いて] まだ出ない。一体いつになったら芽が出るんだろう。

B: 春になったら、ちゃんと芽が出るよ。

(6) A: とにかく明日まで待とうよ。

B: そうだよ。明日になったら、何もかもが明らかになるんだから。

における前件は、「(今度の)春」「明日」というように、どちらも直接的なトキの表現である。春が来てまた明日が来ることは、言うまでもなく話し手と聞き手の両方にとって確定した事実として認識される事柄である。ちなみに、(5)は前件「春になる」に、(6)は後件「何もかもが明らかになる」にそれぞれ焦点が置かれている。

このうち、(5)は、(7)のような「タラ」文の根底の文である(5)' が「(~になる)+タラ」を使ってそのまま出現したものである。

(5)' 春に、ちゃんと芽が出るよ。

その時[⇒春]に、暖くなるのだから。

(7) 暖かくなったら、ちゃんと芽が出るよ。

また、(6)は、(6)' を根底の文とする(8)の代わりに、今日からして一日が過ぎた日、つまり「明日」という直接的なトキの表現を、「(~になる)+タラ」を使ってそのまま文にしたものである。

(6)' 今日から一日後には、何もかもが明らかになるよ。

(8) 今日一日が過ぎたら、何もかもが明らかになるよ。

但し、前件を新情報としてそこに焦点を置く(5)の「タラ」文に対して、その根底の文を、次のようなパターンと見ることはできない。それは、

(5)" 春にハ、ちゃんと芽が出るよ。

その時[⇒春]にハ、暖くなるのだから。

における「ハ」は、トキの語句「春」に旧情報としての主題の「は」が付いたものではなく、「今は芽が出ないが、春には芽が出る。」のように、対比を表す「は」と見るべきだと考えられるからである。これは、後件に焦点があつて、その前件に既知の要素としての主題の「は」が付く、(2)b.、(4)′、(6)′とは異なるものなのである。

以上で見てきたように、未来のトキの「タラ」文はその前件に、動きや事態(が起こる時点)の文のみならず、「トキの語句+になる」が来ることもあり、この場合の「タラ」文はトキそのものをよりはっきりと示しながらも、条件の形式からも外れないでいるものと見られる。

### 3.1.5 前件の不承知

未来のトキの「タラ」文の実際のやり取りでは、次の、それぞれの例のBのように、聞き手が「タラ」文の前件を承知しないことも往々として起こるようである。

(9) A: 給料もらったら、返すよ。

B: ふーん。あなたみたいにのんびりしていて、ちゃんとお給料もらえるの。

(10) A: [余命わずか半年と知って] 私が死んだら、火葬に付してくれ。

B: 何言ってるのよ。何がなんでもあんたは絶対死んだりしないわよ。

上の(9)と(10)のそれぞれのAで、話し手は聞き手との共通認識として前件を近い将来必ず起こる出来事だという前提の下でその時期を伝えようとしているのに対して、それぞれのBの話し手はまるでその前件が起こるか否か、または起こらない出来事として認識しているかのように対応している。要するに、それぞれのAはいわば確定条件として「タラ」を使っているのに対して、それぞれのBはこれを仮定条件として受け取っているかに見える。このように、両者の話に根本的なズレができたように見られるにも関わらず、これら(9)と(10)のやり取りには何の問題もない。それは、このようなやり取りは、(9)Bの皮肉や、(10)Bの切実な願望等のようなニュアンスの効果を狙って用いられているのであって、BがAの確定条件としての「タラ」の意図を認知していないわけではないからである。つまり、これらのBの不承知は、前提を成している状況そのものに対する抵抗、あるいは拒否であつたりして、前件の実現如何のことを疑ったり時間表現としてのただの未来を否定したりするようなものではないのである。ちなみに、このような「タラ」文の意味機能は、前件に焦点のある(9)でも、後件に焦点のある(10)でも見られる。

以上のことは、文中における、未来のトキの「タラ」の意味用法の一つとも言え、単なる

時の表現からは表せないものと思われる。

### 3.2 他の文法形式との違い

従来の研究で、未来のトキの「タラ」と同じ意味のものとして取り上げられてきた「テカラ」「タアトデ」、それから「トキ」「トキニ」を、実際「タラ」と比べながらその違いを考察することで、未来のトキの「タラ」の意味用法を明らかにしていく。

#### 3.2.1 「タラ」と「テカラ」・「タアトデ」との違い

「タラ」と「テカラ」・「タアトデ」との違いを見せているものに、K.A.I.T.(2003;167-169)の次の例が挙げられるが、それぞれの形式についての解説は、今まで行われてきた通り一遍の大まかなものにすぎず、形式間の違いがはっきりしない。K.A.I.T.(2003)は、

(11) A : Bさん、ちょっと手伝ってくれない？

- B : 1. この仕事が終わったらね。  
 2. この仕事が終わってからね。  
 3. この仕事が終わった後でね。

のBの三形式は共通して、「今ではないが「手伝う」と答えているわけであるが、このうち1.「終わったら」は、「仕事が完了することが条件だ」と、特に<条件>を強調したい時に使い、「終わらないうちは手伝えない」というメッセージを伝えているとする。それに、2.「終わってから」は、<順番>を表す表現だから、「仕事が優先である」というメッセージを伝えているし、3.「終わった後で」は、いつ手伝うのかを、文字通り「今ではなく後で」と伝えたい時に使っている、といている。

庵(2000;202-203)によると、「PてからQ」がPに関心がある表現であるのに対し、「PあとでQ」はPとQの前後関係を客観的に述べたものである。このうち「Pあと(で)Q」の場合、Qには命令・意志・勧誘などの文は来にくい、それはQよりもPのほうに意味的な重点があるためだとする。なお、「テカラ」に関連して新屋(1999;118)は、「AてからB」は「A」と「B」の順番を逆にはできないという主張と、「A」をぬきに「B」をするのではないという主張とを含蓄するとしている。

さて、上の(11)Aの「依頼」に対して一番無理のない対応は、(11)B1.「タラ」文ではなからう

か。(11)のB1.は、「分かった。ただ、今はあなたも見ての通り取り込み中なので、この仕事が終わったら、手伝うよ。」と自分の意志を表しているものであり、前件に焦点が置かれている。(11)B1.では依頼を受け入れたものの、今取り込み中で、「あと～分[時間]後」と言いたくても、そのはっきりした時を決めかねているが故に、前提として共有している今の状況、つまり「Bは今仕事をしている。」を伝えることで、その場を和らげているわけである。これは、3.1.1の(3)のやり取りにおいて、「いつ」と言って「時期」を聞くAに対して、Bが「給料もらったら、返すよ。」と、返す「時点」としての前件に焦点を当てて意志表明しているのと同じ答え方になっている。ところで、K.A.I.T.(2003)で(11)B1.「タラ」が条件を強調しているというのは、「タラ」という[条件]の形に引かれてのことだと思われるし、また「終わらないうちは手伝えない」というメッセージにしても、一般に仮定条件「P $\rightarrow$ Q」が「 $\sim$ P $\rightarrow$ Q」を含意するという事に引っ掛かっているのであって、現に「PタラQ」にはこのような含意はなく、何しろ(11)B1.の「タラ」は仮定条件の形式ではない。このような「タラ」に対し、(11)B2.「テカラ」文は、仕事が終わるという前件と手伝うという後件との二つの事態の順番をはっきりとさせ、前件の仕事が終わることが大切だというメッセージを伝えていることになり、依頼の応対としては何となく失礼なニュアンスさえ漂わせているようにも考えられる。また、(11)B3.「タアトデ」文は、二つの事態を時間関係に沿ってただ順々に述べている表現にすぎず、さらに、上の庵(2000)によれば「タアトデ」は、文末に意志や命令などが来にくいこともあって、文末が許諾の意志表現になるはずの(11)のやり取りとしてはやや不自然にも感じられる。

それに、今までの例の(1)-(8)の「タラ」を「テカラ」や「タアトデ」に置き換えてみると、「テカラ」の場合、「\*給料もらってから、返すよ。」\*私が死んでから、火葬に付してくれ。」のような不自然な文になり、「タアトデ」の場合も文末のモダリティの制約で使いにくくなる。

従来の研究において「タラ」の表す意味とされている「テカラ」と「タアトデ」はもっぱら時間の前後関係を表すものであるが、3.1で見たように、「タラ」は文中でそれなりの独特な役割を担っているものである。そもそも「テカラ」と「タアトデ」の前後には対等なレベルの動きが来るのに対して、「タラ」の場合その前件は動きではなく、その動きが実現する時期であるという点から、これらの形式間には大きな違いがあるわけである。但し、「タラ」も基本的には前件の動きや事態と後件の出来事とが時間の流れに沿って行われているということから、この点だけに注目して「テカラ」「タアトデ」と同じものとされてきたと思われる。

### 3.2.2 「タラ」と「トキ」・「トキニ」との違い

庵(2000;200-201)によると、「～とき」は継続する事態に関する時の設定を行い、「～ときに」は一回的な出来事に関する時の設定に使われる。これに対し、「～とき(に)は」は「～が成り立つ場合は」といったニュアンスを持ち、「～が成り立つ場合には、…という事態がよく起こる」といった関係を表したり、一種の条件表現として、「もし～が成り立てば…する」といった関係を表したりする。これらに関しては庵(2000)の次のような例が挙げられる。

- (12) 子供のとき、私はよく熱を出した。  
 (13) 子供のときに、私はアメリカに移住した。  
 (14) 困ったとき(に)は、いつでも来てください。<sup>4)</sup>

上の(12)と(13)を見ると、「トキ」も、「間(に)」や「まで(に)」等、時間を表す他の表現同様「ニ」の役割は大きく、「ニ」が付くか付かないかで後件に一回的な出来事が来るか継続的な事態が続くかがそれぞれ決まるようになる。

未来のトキの「タラ」は、「トキ」「トキニ」の意味になると言われているが、実際に未来のトキの「タラ」文を見ると、ある前提の下で、「前件の動きが終わる時に、後件」のように、前件では「タラ」文全体で一回きりのまとまった出来事を言っており、その後件は今までの(1)～(8)で見たように一回的な出来事になっていることから、未来のトキの「タラ」はどちらかといえば「トキ」でない「トキニ」と置き換えられるはずである。それにも関わらず、(1)～(8)の「タラ」を実際「トキニ」に置き換えてみると、例えば、「? 給料をもらったときに、返すよ。」「? 私が死んだときに、火葬に付してくれ。」と、意味的にやや不自然になってしまう。

従来の研究において、「トキ」「トキニ」が未来のときの「タラ」と同じものとされるのは、「トキ(ニ)」が時を表す代表的な表現であるから気安く言っていることにすぎず、実際の置き換えまでは行かないようである。安(2008a)で、「when」に対応する、「トキ」に準ずる名詞類として、「瞬間」「刹那」「時点」「時期」「矢先に」などを報告しているが、「タラ」と「トキニ」との置き換えが難しいのは、「トキ(ニ)」を含めてこのような類いの時の表現は、まさに「ちょうどその時」を強調するようなニュアンスを持っていて、近い将来に起こることになっているある状況をやんわりと伝える「タラ」とぴったり合うとは言い切れないからだと思われる。

4) 「トキ(ニ)は」は、仮定条件を表しており、未来のトキの「タラ」とは関わりがない。

## 4. おわりに

未来のトキの「タラ」文は、一見して前件が一つの事態として描かれているように見えるものの、現にその前件は、話し手と聞き手が共有する前提の下で、トキと絡み合っている状況を発することで、ときを表しているものである。つまり、表面上二つの事態の組み合わせのように見える未来のトキの「タラ」文の中味は、時の表現が組み込まれた一つの事態を述べているようなものなのである。この未来のトキの「タラ」文は、前件(が実現する時点)と後件の事態が前後関係となっており、詰まるところ前件がときを表してはいるものの、二つの事態の単なる前後関係でもなければ、前件が行われるちょうどその時をもつぱら強調するのでもない。直接的にトキを言うことを避けるか、またははっきりとしたときを決めかねるような時、さりげなくトキに代わる状況を前件に出すわけである。なお、未来のトキの「タラ」文は、前件が未来のトキであることから、当然のごとく後件もまだ起こっていない未来の事態になり、文末に意志や命令、願望などのモダリティを伴うことが多い。

### 【参考文献】

- 赤塚紀子・坪本篤朗(1998)『モダリティと発話行為』研究社出版, pp.8-9, pp.91-94  
 安善柱(2008a)「未来のトキを表す条件形式-「when」との対照を通して-」『東北亞文化研究』17, pp.417-435  
 \_\_\_\_\_(2008b)「時を表す「タラ」表現」『日本学研究』25, 檀國大学校 日本研究所 pp.307-327  
 庵功雄(2003)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク, pp.209-213  
 K.A.I.T.(2003)『実践にほんご指導見なおし本【語彙と文法指導編】』ask, pp.167-169  
 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房, pp.11-12  
 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代(1999)『日本語教科書の落とし穴』アルク, pp.116-123  
 豊田豊子(1987)『日本語の文法Ⅱ 第7章 条件, 日本語教師養成通信講座5』アルク, pp.98-131  
 蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版  
 益岡隆志編(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版  
 森田良行(1990)『日本語学と日本語教育』凡人社, pp.71-101  
 横林宙世・下村彰子(1988)『外国人のための日本語例文・問題シリーズ6 接続の表現』荒竹出版, pp.1-13

---

논문투고일 : 2011년 12월 10일  
 심사개시일 : 2011년 12월 20일  
 1차 수정일 : 2012년 01월 10일  
 2차 수정일 : 2012년 01월 16일  
 게재확정일 : 2012년 01월 20일

---

---

 <要旨>
 

---

### 未来のトキを表す「タラ」文の意味用法をめぐって

日本語では因果関係の「条件」の形式が時間関係の「トキ」の表現として用いられることがある。これに対して、豊田(1987)は「時間がたてば必ずそうなる」と決まっている未来のことを、条件の形で言うもの」としており、その意味用法について横林・下村(1988)は「その時」または「その後で」、森田(1990)は「~タトキニ、~テカラ」と同じだとしている。

本研究では、未来のトキを表す「タラ」文の使用条件と意味用法などについて調べ、トキの表現に何故条件の形が用いられているのかを考察した。それから「タラ」と「テカラ」「タアトデ」、また「トキ」「トキニ」との違いについても考えてみた。

未来のトキの「タラ」文は、一見二つの事態が組み合わせられ、それら二つの前後関係に注目しているかのように見えるが、実は、話し手と聞き手が共有する前提に基づいて、トキに代わる状況を前件に持ち出し、後件の発生時点を表しているのである。これは、何らかの理由で時間をそのまま露に表すのを避けたいか、あるいはそのトキがはっきりと分からないような時に用いられている。また、この「タラ」文は、前後文脈によっては、その前件が起こるはずがない、承知しないなどと、まるで仮定条件のように用いられることがあるが、これは皮肉や切実な願望などを表そうとする用法であって、未来のトキの「タラ」文の一特徴と見ることができる。なお、この「タラ」文は、内面に「テカラ」「タアトデ」、また「トキ」「トキニ」の意味を持つてはいるものの、「タラ」文独特の意味用法をも持っているため、これらの形式との実際の置き換えは多少無理があるように思われる。

#### About the Meaning of the <TARA> Form, which Describes the Future Time

In Japanese language, the <TARA> form is occasionally used to express the time. About this, Toyota (1987) said that it is natural to use the <TARA> form to describe things that would certainly happen as the time passes. According to what Yokobayashi & Shimomura (1988) said about the meaning and the usage of the <TARA> form, <sonotoki> or <sonotode> is used synonymously with the <TARA> form. Morita (1990) said that <-tatokini>, <-tekara> have the same usage as well.

In this study, I researched about the terms of usage and the meaning and the usage of the <TARA> form, and the reason why it is used to express future times. I also tried to find out the differences between <TARA> and <-tekara>, <-taatode>, <toki> and <tokini>.

It seems like the <TARA> form -which expresses the future time- has two situations combined together, giving attention to the context, but actually it is showing when the consequent happened, based on the fact that both listener and speaker already know, and replacing time with a situation. This is used when it is hard to tell a certain moment bluntly. It is also used when the speaker longs that the moment mentioned with the <TARA> form would never happen. Of course the <TARA> form contains the meanings of <-tekara>, <-taatode>, <toki> and <tokini>, but because it has its own meaning as well, it is hard to say that the <TARA> form has the same meaning with those four forms.